

ランボー

—『イルミネーション』の二つの《都市》あるいはヴィクトリア朝のロンドン—

三好美千代

序文

散文詩集『地獄の一季節』の最後の詩〈別れ〉の中で、ランボーは「絶対的に近代的でなければならぬ。Il faut être absolument moderne.」と書く。

「近代的 moderne」という形容詞は『地獄の一季節』の中では、ここ一箇所だけ。唐突に現れるこの言葉は非人称主語しか持たず、何において近代的でなければならないのか、あるいは、「近代的」とは、どういうことを指しているのかと考え込ませられる。ところで『イルミネーション』において、この言葉は二つの《都市》⁽¹⁾と題される詩を中心に何箇所かで用いられており、それを形容する名詞が存在することで文脈から受ける唐突さもない。そして、ロンドンをモデルに架空の都市を描き出すとされているランボーの《都市》は、細かく分析していくとロンドン以外のなにものをも描き出していないことが明らかになってくる。架空の都市というよりまさにロンドンそのものを、その本質を描き出そうとしているのである。ランボーはロンドンという当時ヨーロッパでも最大の大都会をどう受け止めたのであろうか。ここでは、19世紀のヴィクトリア朝、産業革命期のロンドンを資料に、二つの《都市》の中に見られる比喩を一つ一つ検証していきながら、ランボーにとってのロンドンを、そしてランボーがそこに見た「近代」を浮かびあがらせてみたい。

《都市》とロンドン

まず、一つ目の《都市》を取り上げよう。ロンドンにこだわるわけだが、この詩が含まれる詩集『イリュミナシオン』のタイトル自体が、英語からフランス語に入った言葉であり⁽²⁾、おそらくロンドン滞在がなければ生まれなかったものである。以下全文である。

私は、どんな既知の趣味も家の内装や外装や都市の設計において避けられているので近代的と思われる大都会の束の間の、さして不満のない市民です。ここではいかなる偶像崇拝的記念建造物の痕跡も示すことは出来ません。そして、道徳と言語は単純な表現に還元されてしまっているのです。このお互い知り合うことを必要としない何百万の人々は同じように教育うけ、仕事につき、老いを迎えるので、その人生は、法外な統計が大陸の民族達について出したよりも、何倍も短いに違いありません。ですから、私の窓から、濃いあいも変わらない石炭の煤煙―我々の森の蔭、我々の夏の夜！―の中を新しい亡霊達が歩きまわっているのが見えるように、私の故郷、私の心のすべてである私のコテッジの前には新しい復讐の三女神達が見えます。というのもここでは何もかもが次の様子をしているからです―我々の良く働く娘で召使いである涙のない「死」、絶望に沈む「愛」、街の泥の中で啼いている美しい「犯罪」の。

Je suis un éphémère et point trop mécontent citoyen d'une métropole crue moderne parce que tout goût connu a été éludé dans les ameublements et l'extérieur des maisons aussi bien que dans le plan de la ville. Ici vous ne signaleriez les traces d'aucun monument de superstition. La morale et la langue sont réduites à leur simple expression, enfin! Ces millions de gens qui n'ont pas besoin de se connaître amènent si pareillement l'éducation, le métier et la vieillesse, que ce cours de vie doit être plusieurs fois moins long que ce qu'une statistique folle trouve pour les peuples du continent. Aussi comme, de ma fenêtre, je vois des spectres nouveaux roulant à travers l'épaisse et

éternelle fumée de charbon notre ombre des bois, notre nuit d'été! ...
des Erinnyes nouvelles, devant mon cottage qui est ma patrie et tout
mon cœur puisque tout ici ressemble à ceci, la Mort sans pleurs, notre
active fille et servante, un Amour désespéré, et un joli Crime piaulant
dans la boue de la rue.

この都市は、「近代的と思われる」都市である。どのような記念建造物もないヴェルレーヌは友人のルベルティエ宛、1872年9月24日の手紙に書いている⁽³⁾。ここに描かれるのはシティと呼ばれる、ロンドンの旧市街、もっと言ってよいなら、さらに東のイーストエンド地区からドック地帯にかけてで、観光ガイドブックでもほとんど見るべき歴史建造物は見当たらない。さて、デンマークの建築家ラスムッセンは、パリやウイーンなどの大陸の都市を高層の建築が立ち並ぶ集中型とした上で、ロンドンは一戸建ての住宅中心の散開型の都市であると言っている⁽⁴⁾。そうなった理由の一つとして、彼は政府庁が、現在はロンドンに含まれる旧ウエストミンスター市にあり、旧ロンドンは商業都市として発展してきたことを挙げる。彼は住宅建築について「建築にたいするロンドンの貢献は単純性である」⁽⁵⁾と言う。1666年のロンドン大火の後、木造建築は禁止され、ロンドンは煉瓦と石の都市となり、18世紀には装飾性を排した「煉瓦で出来た等質の箱状の棟」が立ち並ぶこととなる。彼は室内についても家屋の内部の豊かさを演出する単純さと今日にも通じるモダニズムを語る。ランボーが「既知の趣味のない」と言った建物が19世紀にはロンドンの平均的な住宅となった。ここで語られる都市は後で取り上げるもう一つの都市、旧ウエストミンスター市をモデルとした過去の様式にあふれた巨大都市と鮮やかな対比を成すものとなる。

ここでは言語や道徳が最も単純な表現を持つ。道徳は一種のピューリタニズム的、感情に流されない自己抑制に基づいた道徳、勤勉、節制、正義といった目に見える形の道徳である。言語も直接的となる。フランスの英文学者ルイ・

カザミヤンは、フランス語と比較して、映像の喚起力は、事物を具体的に捕らえる英語のほうが遥かに高いと書いている⁽⁶⁾。フランス語のように観念的な言語ではないのである。1900年のロンドンの人口はおよそ658万人余り。パリは271万人余りで⁽⁷⁾、1872年から1873年にかけてランボーが滞在した当時すでに「数百万人」のバリエに倍する大都会であった。「同じように教育を受け、仕事につき、老いをむかえるので、人々の人生は短いものに違いない」と感じさせるのは、ロンドンの下層労働者であり、彼等は長時間労働に従事し、それで自らの生活を支えるためだけに生きており、他の社会の人との関わりがあらうはずもない。1870年、下層労働者に教育を受けさせなければ近代国家としての発展は望めないという認識に基づき、義務教育の原則を打ち出した初等教育法案が可決⁽⁸⁾された。それ以前、工場で働く子供達に対する無償の日曜学校、助教授法学校等、様々な試みがなされている。ここでの「教育」は中上流層の人々が受ける教育ではなく、下層労働者の教育を指している。1880年のイギリス男性の平均寿命は42才⁽⁹⁾で、貧民層は劣悪な住環境、栄養不良、長時間の労働、そして職業病を抱えてそれを遥かに下回った。「法外な統計」とは1965年に行われたヨーロッパとアメリカ合衆国を対象にした大がかりな国勢調査のことである⁽¹⁰⁾。ロンドンという現実の都市の一つの側面がクローズアップされる。

さて、ランボーはこの都市に、まさにロンドンの象徴である煤煙を配する。ここには、森の代わりに永遠の煤煙の中を徘徊する新しい亡霊達がいる。ランボーはその短い人生を持った人々をはや亡霊にしてしまう⁽¹¹⁾。さて、「コテッジ」はエンゲルスによれば労働者達のため郊外の工場の近くに建てられた庭つき一戸建の慎ましい住宅⁽¹²⁾、まさに憧れのマイホームを言うが、ほとんどの都市の下層労働者には不可能なものであったし、その実態は狭い家屋の一室に一家族がひしめきあうというものであった。そして、そのコテッジの前には冥府に住み、殺人などの罪を犯したものを罰するというギリシャ神話の三女神が近代の衣装をまとうて存在する。神話によれば彼女達は冥界に住み、亡霊達を責め苛む。涙を見せない我々の働き者の娘かつ召使いである「死」がいる。都市

の労働者は40才まで生きられれば運のいいほうだった⁽¹³⁾。都市には悲しみが麻痺するほどに日常的に多くの死がある。絶望に沈む「愛」がいる。これらの人々は愛の宗教をしても救えない。街の泥の中でびいびい泣いている綺麗な「犯罪」がいる。「泥ひばり mud-lark」と呼ばれるテムズ川の泥の中から石炭などを拾う子供達は船に忍び込んでわずかな稼ぎのため石炭などを盗み、多く犯罪者となっていく。三女神はこの冥府に住む亡者に与えられた罰なのだ。『地獄の四季』の最終章《別れ》の中でこの都市は聖書的イメージでたち表われる。都市は「食人鬼の女王」と比喻され、「何百万という最後の審判で裁かれることになる死んだ魂と肉体」を貪り食い、彼等への「数限りない愛」は詩人をイエスの如く「十字架にかけた」と回想される。「近代的と思われている」都市は、一人の「束の間の市民」の目を通して総括され、そこは冥府となり、その近代性は決して謳歌されるべきものではないことを暴露する。

巨大都市の幻想

《都市 villes》は構想上二つの部分から成る。音や音楽が全体を満たし、伝説やギリシャ神話の人物達がいる祝祭空間を現出する《都市Ⅱ》の方は割愛して、ここでは都市の情景描写が細かく述べられている《都市Ⅰ》の方のみを見ていく。単数の《都市 ville》は近代の大都市の様々な矛盾に焦点があてられた。複数の《都市 villes Ⅰ》では都市の巨大さがまな板の上にあがる。この都市は先の詩とは少し異なり、様々な都市のアマルガムの様相を呈するが、ここにもロンドンが色濃く描かれているのではないだろうか。最初の部分である。

公共建築が並ぶアクロポリスは近代の野蛮が持つ概念を最も巨大におしすめたものだ。この、あくまで灰色の空が作り出す、どんよりとした光、建物の傲然たる輝き、地面の万年雪を言い表すのは不可能だ。巨大さへの奇妙な好みから、あらゆる古典時代の建築の傑作が再現された。私はハンプトンコート

の二十倍の広さがある場所で開かれる絵画展を見て廻る。なんという絵だ！ノルウエーのネブカドネザルのような人物が、官庁の階段を作らせた。私が会うことが出来た下級役人からしてもうブラフマー神達よりも尊大で、建造物にいる巨像達や官吏達の番人の様子を震え上がった。

L'acropole officielle outre les conceptions de la barbarie moderne les plus colossales. Impossible d'exprimer le jour mat produit par ce ciel immuablement gris, l'éclat impérial des bâtisses et la neige éternelle du sol. On a reproduit dans un goût d'énormité singulier toutes les merveilles classiques de l'architecture. J'assiste a des expositions de peinture dans des locaux vingt fois plus vastes qu'Hampton-Court. Quelle peinture! Un Nabuchodonosor norvégien a fait construire les escaliers des ministères; les subalternes que j'ai pu voir sont déjà plus fiers que des Brahmas et j'ai tremblé à l'aspect des gardiens de colosses et officiers de constructions.

先ほどの都市とは対象的に過去の様式が建物を支配し、その巨大さと呼応するように尊大な人々がいる。アクロポリスは高台に築かれたギリシャの城塞都市で、後に都市が平野に移ってからは、要塞、神殿等が置かれた。ランボーは神殿の立ち並ぶアテネのアクロポリスを考えており、アクロポリスに例えられている場所をロンドンの中に搜すと、旧ウエストミンスター市の地区にある官庁街、ホワイトホールがある。各々の役割を持つ大臣はギリシャの神々とだぶるだろう。花崗岩を使った18世紀からの様々な様式の建物が並び、外務省、インド省、内務省、植民省の合同庁舎の建物はギルバート・スコットの手になるイタリアの建築様式。ホテルのような内装だそうで、大階段がある⁽¹⁴⁾。この建物を建てさせたパーマストン(1784-1865)はイギリス帝国植民地主義時代の立役者で、ランボーはその人物を、古代バビロニアの国王、ユダ王国を滅ぼし、バビロン補囚で知られるネブカドネザル二世(在位BC605-562)に例える。聖書の中ではイスラエルの民に敵対する極悪非道な侵略者である。パーマストンは

中国との阿片戦争、クリミア戦争、インドでのセボイの反乱の弾圧等に外務大臣として関わっており、首相にもなっている。「ノルウェーの」とあるのは、ノルマン人が8世紀から11世紀にかけてバイキングの名で知られ、戦いと略奪を繰り返したことから、海運力にものを言わせたイギリスを語りたかったのだろうか。また、ノルマン人のウイリアム征服王はウエストミンスター市で戴冠しているので、その末裔だと言いたかったのであろうか。いずれにしてもパーマストンがインドの植民地化に関してまさに「ノルウェーのネブカドネザル」だったのは確かである。

さて、ハンプトンコートはロンドンの西にある、1760年まで英国の宮殿として使用されていた古典様式の建物で、ランボー当時、既にコレクションを誇る美術館であった。ホワイト・ホールを北に抜けるとすぐに、トランスファルガー・スクエアをはさんで、ナショナル・ギャラリー、ナショナル・ポートレート・ギャラリーがあり、19世紀の古典主義の建築で、官庁街と区別される建物ではない。そしてランボーにおいて絵画は「詩＝ポエジー＝人の持つ価値観」に通じる。それらの絵画はランボーにとって馴染みのあるものではない。

下級役人を譬えるブラフマー神は創造神。ビシヌ神、シバ神と共にヒンズー教の三主神の一となる。インドのカースト制度はヒンズー教に基づく。そして、アクロポリスの巨大な神像つまり大臣達あるいは官吏達の番人とはホース・ガーズのみじろぎだにしない馬上の衛兵だろうか。近代の野蛮、領土を広げ帝国主義的植民地支配を行なうイギリスの総本山とも言える場所にはまさにその尊大さを象徴するような建物があり、人々がいるのである。そのあと、馬車の入れない、庭を四角く囲むテラス・ハウス（棟割連続住宅－イギリス人は他の家族と上下に階を接することを好まず、裕福な人々は何層にも階をなすテラスハウスに住むことが出来た。その中庭は外と遮断された空間で、実際に馬車は入れなかった）や公園について語られたあと、次の文章が続く。

上の地区は説明のできない部分がある。船のない入江が巨大な街灯を乗せた埠

頭の間で青い電の海を転がしている。短い橋がサントーシャベルのドームの下に直接出る間道に繋がっている。このドームは直径が約15000ピエある芸術的な鋼鉄の骨組みから成っている。

Le haut quartier a des parties inexplicables: un bras de mer, sans bateaux, roule sa nappe de grésil bleu entre des quais chargés de candélabres géants. Un pont court conduit à une poterne immédiatement sous le dôme de la Saint-Chapelle. Ce dôme est une armature d'acier artistique de quinze mille pieds de diamètre environ.

「上の地区 le haut quartier」という表現は、ここが旧市街からみればチームズ川の上流にあるためだろうか。そして、チームズ川は河口からさほどの距離はなく、言ってみれば一種の「入り江 bras de mer」であろう。『イルミナシオン』に《橋》という詩があり、「水は灰色と青で、入り江のように幅広い。L'eau est grise et bleue, large comme un bras de mer.」との一文がある。「巨大な街灯を乗せた埠頭」とはヴィクトリア・エンバンクメントである。このエンバンクメントは先程のホワイトホールのすぐ脇にあるチームズ川河畔で、北河岸の湾曲部を約2.4キロメートルにわたって、立派な「街灯」の並ぶ壮麗な並木道を備えた道路にしている。ヴィクトリア朝の栄光を示すエンバンクメントは、それが交通の要所としてのチームズ川＝入り江にあり、埠頭でない分不可思議に映ったであろう。そして、鋼鉄の骨組みの巨大なドームが現れる。サントーシャベルはステンドグラスの美しさで知られているバリの礼拝堂である。そして、この建物にあたる建築物をウエストミンスター界限にぜひとも探し出さねばならない。ランボーはこの詩の中でこの界限しか描き出していない。チャリング・クロス駅はエンバンクメントに垂直に作られた新しいターミナルで、駅前の広場にはエドワード一世が亡き妻の思いでに作らせたエレオノールの十字架のレプリカがある。列車がハンガーフォード橋を渡ってすぐが駅舎で、橋には歩行者用の通路も設けられている。このあたりにランボーの想像の源がありそうである。イギリスの鉄道の発達は鉄工業の発展を促し、当

時作られたロンドン市内の駅舎は天蓋に多く鋼鉄とガラスが用いられる。セント・パンクラス駅は長さ210メートルに及ぶガラスの天蓋を持っている。ガラスと鉄の天蓋は1871年に完成したロイヤル・アルバート・ホール、その他様々な建造物にも用いられている。ただ、この巨大さは尋常ではない。15000ピエはメートル法に換算して5キロメートル近い長さである。1851年の万博の際作られたクリスタルパレスでも横550メートル、縦125メートル、高さ53メートルにすぎない。ランボーはここにイギリスの鉄工業が生み出した近代の聖堂を創出している。

銅の歩道橋やブラットフォームや玄関ホールや柱を取り巻く階段などの何箇所かで、都市の深さを推測することが出来ると思った。このような驚異は考えもしなかった。アクロポリスの上や下の地区の階層はどこに位置するのだろうか？ 僕達の時代の異邦人にとっては測り知ることが出来ない。商業地区は単一の様式の円形広場で、アーケードのついた回廊がある。店は見えない。けれども、車道の雪は踏み荒らされている。ロンドンの日曜日に歩いている人と同じくらい僅かの富豪がダイヤモンドの乗合馬車の方へ歩いていく。赤いビロードのソファァーがいくつか。百から八千ルピーの極地の飲み物が供されている。この広場に劇場を探そうと思ったが、店にはかなり暗いドラマがあるはずだと気がついた。警察はあると思う。けれども法律は奇妙なものに違いなく、ここでの山師達のイメージを持つとういうのはあきらめる。

Sur quelques points des passerelles de cuivre, des plates-formes, des escaliers qui contournent les halles et les piliers, j'ai cru pouvoir juger la profondeur de la ville. C'est le prodige dont je n'ai pu me rendre compte: quels sont les niveaux des autres quartiers sur ou sous l'acropole? Pour l'étranger de notre temps la reconnaissance est impossible. Le quartier commerçant est un circus d'un seul style, avec galeries à arcades. On ne voit pas de boutiques. Mais la neige de la chaussée est écrasée; quelques nababs aussi rares que les promeneurs d'un matin de dimanche à Londres, se dirigent vers une diligence de diamants. Quelques divans de

velours rouge: on sert des boissons polaires dont le prix varie de huit cents à huit mille roupies. A l'idée de chercher des théâtres sur ce circus, je me réponds que les boutiques doivent contenir des drames assez sombres. Je pense qu'il y a une police. Mais la loi doit être tellement étrange, que je renonce à me faire une idée des aventuriers d'ici.

ここでは都市の広がり、垂直方向が、深さが問題とされる。国鉄は貧民街を見下ろす陸橋の上を走っていたし、ロンドンにおける地下鉄の開業は1863年である。またテムズ川の下には地下道が作られていた。歩道橋あるいはブラットフォーム、イタリア風の建物の吹き抜けの玄関ホールとその太い柱を取り巻く階段は十分に垂直方向に広がる都市のイメージを惹起する。

さて、ここに出てくる「円形広場 circus」はビカデリー・サーカスであろう。ホワイトホールを北西の方向に500メートルほど進めばビカデリー・サーカスに出る。19世紀にはリージェント・サーカスの名称を持ち、高級商店街であったリージェント通りが横切る。この通りはジョン・ナッシュの手になり、当時のガイドブックに「建築の統一性という観点から見た場合、ロンドンで最も素晴らしい通りである」と書かれており⁽¹⁶⁾、ランボーの言う「単一の様式」という表現と一致する。「ソファア」とあるのは低いソファアを置いた東洋（トルコ）風のカフェのことで、19世紀にパリで流行したそうであるが⁽¹⁷⁾、ここでは極地の飲み物、体を温めるアルコール類を出すパブであろう。ルビーはインド、当時のイギリス植民地の通貨単位である。アーケード街は宝石類などを売り、夜と日曜日には門が閉じられるバーリントン・アーケードなどがある。「商店boutique」が見えず、「nabab」が往来している。ロンドンの日曜日は安息日が守られ、確かに人通りが絶えたそうである。「大守nabab」はムガル帝国時代(1526-1858)の高官に付けられた尊称で、英国植民地時代には転じてインド帰りの英国の大富豪を、そして金持ち全体の蔑称ともなった言葉である。「nabab」がおり、ルビーはインドの貨幣単位となると、ここで英国の植

民地、特にインドを暗示しようとの意図があるものと思われる。「nabab」達が、植民地、すなわち詩人には見えない「商店boutique」でどのようなことをしてきたのか。確かに「かなり暗いドラマ」があった。踏み荒された雪、ダイヤモンドの馬車は象徴的である。植民地には支配する側に有利な法律しか存在しえない。「山師達aventurier」とはまさにインドにおけるイギリスの、冒険をもともせぬ「貿易商人adventurer」達ではないだろうか。東インド会社時代、高級社員の「実質的な莫大な収入は、いろいろ、恐喝、裏取り引きから得られ」⁽¹⁸⁾た。1857年のセポイの反乱以降、ムガル帝国は崩壊、東インド会社は解消、インドはイギリスの直接統治となるが、イギリスの商人達はインドの富をあさり続けたはずである。以上のように辿って行くと、ランボーはホワイトホールを中心に、物理的には自分の歩く範囲のごく狭い地域を描き出していることになる。しかし、そこにはまさにヴィクトリア朝のロンドンが、そしてイギリスが、凝縮された形で存在するのである。

町外れは、パリの美しい通りと同じに優美で、光に輝く空が広がる。この民主主義的な場所には数百人がいる。そこはまだそれ以上家が續いていない。奇妙にも郊外は田舎に續いている。そこは永遠の西洋を森と素晴らしい作物で満たしている〈領地〉で、野性のジェントルマン達が作りだされた光のもとで、自分達の年代記を狩っている。

Le faubourg, aussi élégant qu'une belle rue de Paris, est favorisé d'un air de lumière. L'élément démocratique compte quelques cents âmes. Là encore les maisons ne se suivent pas; le faubourg se perd bizarrement dans la campagne, le <Comté> qui remplit l'occident éternel des forêts et des plantations prodigieuses où les gentilshommes sauvages chassent leurs chroniques sous la lumière qu'on a créée.

ジェントルマン達の送る田園生活への憧れからか、ロンドンの富裕な人々は郊外に家を持ち、鉄道で市内に通勤するのが理想であった。閑静な住宅街が郊

外に広がる。新興の郊外から田園は直接続く。封建的制度がまだ支配している場所である。〈Comté〉は英語に訳せば「county」でこれは「伯爵領あるいは封建時代の世襲支配者の土地」を意味し、また同じく英語の「田舎country」に音が似ている⁽¹⁹⁾。彼は括弧付きで大文字の〈Comté〉におそらくは「田園」と「領地」の二つの意味を担わせている。そしてイギリスの「ジェントルマン gentleman」はそのままフランス語にすれば「貴族 gentilhomme」であるが、英語では貴族ではなく大土地所有地主階級を言う。1870年代、ジェントルマン達はイギリスの農地の半分以上を所有していた⁽²⁰⁾。彼らの日常は自分の領地での狩りが、所有階級の威光を示すものとして大きな部分を占めていた。ここでの表現は、ギュイヨーが言うように「狩猟年代記 *chronique de chasse*」の転倒であろう⁽²¹⁾。神の創った光ではなく人間の創った光、それはテクノロジー信奉を産み出した産業革命を言っているのだろうか。そうした時代にカントリー・ライフを送るジェントルマン達はランボーにとって「近代の野蛮」にも通じる野性の者達だったかもしれない。

終わりに

ランボーの〈都市〉を頼りに我々は19世紀ヴィクトリア朝のロンドンを訪れた。二つの詩において、ランボーの観察者としての立場には微妙なずれが表われる。一方は「束の間」ではあるが、「市民」として呪われた人々への同化を志向する。他方は「異邦人」として尊大さ、巨大さの理解の外にいる。パリ・コミュニケーションに共感を示したランボーの本質は全く変わっていない。そして、「絶対に近代的でなければならぬ」と言ったランボーの目に映る近代都市は『地獄の季節』の最終章〈別れ〉の「素晴らしい都市 *splendides villes*」では決してない。まがいものの近代性、近代の野蛮。ランボーは、彼の言うヴィジョン（幻覚）を通して繁栄をきわめた大都市の中に、復讐の女神達を、またアクロポリスを、植民地を見る。ランボーにとってはヴィジョンを見ることが

まさに詩人としての必須事項であった。そして、この二つの詩において、彼の重層するヴィジョンの中にロンドンという都市の本質が表われてくる。散文詩の世界で、ランボーが詩の音楽性を脇に置き、ヴィジョンを追求した理由の一つがこの二つの《都市》の中に見えてくるのである。

(1) 二つの《都市》のうち一つは、単数で「ville」と題されている。もう一つは複数で「villes」のタイトルが付され、ジェルマン・ヌボーの清書の手が入ったため、二部構成をなす詩の間に別の詩が挟まれ、一部と二部とが逆になっていたことが草稿研究からはば、明らかになっているが、テキストによって、二つの「villes」をわけてあるものと(その場合、三つの《都市》が存在することになる)、複数の「villes」を一つの詩に組み換えてあるテキストがあることをこたわっておきたい。

(2) 「Illumination」は英語からはいった言葉で古い写本に描かれている彩色画を意味する。「イリュミナシオン」のタイトルは初期にランボーが《母音》に色付けをしたこと、あるいは、《盗まれた心臓》《僕の可愛い恋人たち》の中で詩をフレスコ画、あるいはキャンバス画に譬えたことからの帰結として、一貫性を持つ(拙稿「ランボーとプラトニスム」詩論15号、「ランボー：《僕のかわいい恋人たち》解説に向けて」年報フランス研究28号参照)。最終的に自らの詩集に彩色画のタイトルを与えたわけである。そして「地獄の一季節」の《言葉の錬金術》の中でランボーは自分の好んだものとして「大衆向きの彩色画enluminures polpulaires」を挙げている。「彩色画enluminure」は「Illumination」と同義でこちらの方はフランス語である。ロンドン滞在によって、英語のタイトルが着想され、この詩集のタイトルとなったようである。

(3) 《ARTHUR RIMBAUD, CEVRES COMPLETES, CORRESPONDANCE》Edition présentée et établie par Luis FORESTIER : Robert Laffont : 1992, p.511

(4) 「ロンドン物語—その都市と建築の歴史—」S.E.ラムッセン著、兼田啓一訳、中央公論美術出版、1987、p.3

(5) 「ロンドン物語—その都市と建築の歴史—」p.218

(6) 「イギリス魂」ルイ・カザミヤン著：手塚リリ子・石川京子訳：社会思想社：1971p.136

(8) 「イギリス近代史」村岡健次・川北稔編著：ミネルヴァ書房：1986 p.214

(7) 「事典現代のフランス」大修館書店、1977、p.20

(9) 「シャーロック・ホームズの生まれた家」ロナルド・ピアソール：小林司・島弘之訳：新潮選書：1983、p.228

(10) 「ランボー全詩集」平井啓之、湯浅博雄、中地義和訳：青土社：1994、p.713

(11) ランボーの構文破戒のためここに出てくる亡霊をエリュニエスと同格と見ることも可能であるが、神話との整合性、また、いる場所の違い等から筆者は別のものとした。

(12) 「マルクス＝エンゲルス選集」第12巻「住宅問題」大月書店：1950、p.124

(13) 「シャーロック・ホームズの生まれた家」p.228

(14) 「倫敦！倫敦？」長谷川如是閑著：岩波文庫：1996、p.142

(15) 「ロンドン物語—その都市と建築の歴史—」p.193

(16) 「100年前のロンドン」マール社：1996、p.116

(17) 「ロワイヤル仏和辞典」旺文社

(18) 「イングランド人民の歴史」A.L.モートン著：鈴木、荒川、浜林訳：未来社：1972p.256

(19) ARTHUR RIMBAUD, CEVRES COMPLETES, CORRESPONDANCE) p.513

(20) 「イギリス近代史」p.146

(21) 「ランボー全詩集」p.719

(文学部非常勤講師)